

非韻傳書

911.3
/ 1

自由方ぐー 果もまよめりうらむ物とこふ三ノ
教火の形刻陽を好まの祈禱なり

歌仙三十六教

ア十二エヤニエヤウマシラトコニアヒ又 十八
ア十二エヤニエヤウウシラトメニアヒ又 十八

百韻とふ事

百もとぬとも百種百常るとつふへまをこりに教
とハ中とる鬼後つ中板かー知んかー俳諧
くちりきりし此教詩をいつ刻たる祈を響
月をく用を分めし

表ハウ

裏十四句し

裏十六句と物

定ぬさるり 律詩絶句の段の教なり

ゆり表ノ趣

起 承 轉 合 四句メ迫

五句メヨリ

起 承 轉 合 月、空、轉の佛

裏の月、空の産ゆ奇あり起 終 轉の石ハ極テ

あーうらじ 再 趣 承の少 妙 内多韻の字解し

うーのうらうら別系あり新ハ多新とくぬ好

祈禱の俳諧 一ノ口交

誹者俳也カハシハイハヒシ ぬすんもソツつを

上賦ハ山詠をけり詠と云ナリ

下賦ハ山詠を山何と云ナリ

一字詠歌ハ香ハ数ナリ

二字詠歌ハ玉ハ一箇ナリ

三字中略ハあやめハ一箇ナリ

四字上下略ハうぐいすハ一箇ナリ

ひのつが遠くよはね不苦くひ
くはねくく一訓ありくマ史

五字中三字略ハ杜若ハ一箇ナリ

三字上下略ハあやめハ一箇ナリ

上賦下賦の分排云をいへばあまいやあまひやと

ソハハ重秘成と云人の云ふし切字の事あまひや

句ナリ切字ありまを一句の詠歌をきくはけり

とく極く用くツ詠の排と云ふ地は意ナリ

を初めのあまひはるるあまひの中ハ排詠の成

詠ナリけりは境極ちるるナリ

一と云ハ

あまひたくとへはるるあまひとを
あまひのと云ハ

オハハ半は角と云ハ一と能ハるるあまひ
はれオハハのと云ハ

一と云ハ

句のあまひと云ハ一と能ハるるあまひ
はれオハハのと云ハ

凡ちの句ナリフルツクと字をたぐく詠ものごと

よと云とおとくはるるしあまひのあまひと

あまひのあまひと云ふじと云ふまはせし詠ナリ

一 諸君の御座のありし布園より

一 三字印

ウツク又と信の香もかゝりむめのを

梅花清香の外は穢の白ひらきとよふら

たるといふは香はと里手あるとよ

何とて香の白キは耐スル物なりとよふに

切三字格

一 湯衣現在未来の

いよ通し一 現在に切字しよとや

一 切未未あるへ一 なるる一 ありし

一 ちれやいぬ哉とんよとよ

一 神祇釋教並の大智とやするありし連歌師も

の分秘一 ちりし予世の中の空近を考よは

秘哉とす家法とへ傳中とる他云か

ハある信ひとる神一 神祇のうよ二句を

を之を去と相する未達し釈を何とぞ

と神祇ハ三句をナリ並の情の神祇格別

賦物、るは、一 説とありし信神

連歌ハニイハリツクハとよふやまとだけ

盪錫とーしんーうーふらの祈禱うれゝ哉のまや
すうとだけとふん書とやーを人の説と
雅

賦

日下武賦

テニ志
其老

賦

其老
武亦
格十賦不用

着成書日下とつよせらひく書へーとよ
日下武賦のまやふんー哉あゝまの懐伴の瑞徳の
小准ーとつよふんかこむりーまこる御や
賦うゝとをうーしんーなふんやーと古
瑞徳とつよふんかこむりーまこる御や
つよふんかこむりーまこる御や

夢
夢

人の後ありの記和表十白いーいゆふた段の
おつーしきまあ理のまははくー以只一過り
いゆふた段の記和表十白いーいゆふた段の
まあ理のまははくー以只一過り
の記和表十白いーいゆふた段の
一夢又相のまははくー以只一過り
まあ理のまははくー以只一過り

夢

夢

事しと

木四日夕 木四夕 一の記和表十

いほとつよふんかこむりーまこる御や

の名をまくとしむにちる座のより人しむまはし
傳ししむ各に連なる師のものよりや久用し
中つらるる者教をすし夢のさな新のらる
る相をひしくしあまの形後後のんつ
くしあまのしきしむくしはぶ系座の聖
像をけ燈香を地物等す年乙りし甲はる
は亭主編成すし宗匠牙三とすし一巡
一家の世代としふらん世代と年とすし
又牙三は世代としし一巡を付しあまのら
しる者よの教時呼附つ事白とすし成ま
し

ゆめとふちりしき座の教ひし柳しむへ
たむやまきとしし過る事千りりりきと叫
々しく新宅其不其の辨證のらあま
一十句の仕中しは割系凡概を三人どり
と宗匠し教向とくは宗匠十人し現
と中つらるるしあまの宗匠三人し
の形あまの宗匠云ふ宗匠とん三人
形あるし教向のしをすし
あまのししは柳しむくしあまの
一たんすしし中二天寺すし

四寸五分

ト云方根ナリノ用ニ係流ノ流ナリ
一春季之中ニ

箱鳥 白鳥 各ニウケヒスノ故ニ

表ヨ用未ナリ又ウケヒナリ 雄器記ニ云ナリ

一葉ノ箱ニ係レテナリト云ナリ 表ノナリト

カシメノ我カシメト云ナリト云ナリト云ナリト

係レテナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一馬破本ト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

と讀ムト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

馬の破本ありし甚し

社考

一加冠ノ賊ト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

冠賊ト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一細ハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

夕夜ノ夕ハ未御ト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

是ハ半ト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一ツツハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一ツツハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一ツツハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一ツツハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

一ツツハ初ノト云ナリト云ナリト云ナリト云ナリト

ありとありと考皮なうと申すの由はつとせし
にせよのちがひしとせしと物足の形はつと
のちい赤煉のうよ教くとせしとものせし
は地地りありとせしと真なりちりあり
上下の白と二五、三四、五二、五三とせしと
そのせしとせしと

三五 三四とは

和歌のよめをとせしとせしと
侍の君のありとせしと

五二 四三とは

和歌のよめをとせしと
侍の君のありとせしと

二五と五のありとせしと三四とせしと
そのせしとせしと

一五の書席類曲流南時形はつとせしと
其他者とせしと

赤煉はハ云とせしと
一三才時 十時のはつとせしと

そのせしとせしと
そのせしとせしと

そのせしとせしと

其言時 け雲 廻雪 長馬

高心 遠心 沈心 有心 物心

正心 謹心 持心 心極 善祥

友心 花露 善祥 竹祥 心善祥

遠心祥 拔群 字古 面白 一真

系曲 懷祥 息縁 一草 拾鬼

強力 附の 六伴 日ツトリ 日ツバベ 日ツバベ 日ツバベ

たぢの題をい時つるまゝくしてしめおき

功に 兼司いふくも海のぬりぬりものしこ

主人云とまきくいふくもいふくもいふくもいふくも

うたふ主人云いふくもいふくもいふくもいふくも

一景ハ 賢愚共ハ 眼前ヨ 石連排ノ 群ハ いと

能通の秘也いサよとあり云川とてを

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

一景ハ 賢愚共ハ 眼前ヨ 石連排ノ 群ハ いと

浅く初のと初のと群し感ハ物をいふくもいふくも

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

あふ秘のすくもをいふくも又も若なりし

ふやハ 極毛——らのんてんたのうやう 若のま
いとけくニニエとつりら

○浦林——とまろるふりら

聖 ○厚床 喰く切子 盡む 尸らく

ありハ けりさひーくやう 終つと 浦子 飯かーし

とーん せけく 春の 柳を 行ふ 糸は 金と 和

んのもい 喜八集

家ヤ ころの 移と ちかひーく せはーき 秋の 神凡

○花あひ 似たり ちかひの 一助

○胡蝶 飛の人の ちかひと ちかひ ちかひ

念ひ 成け けり ちかひの 似たり ちかひの 皇女 浪白

ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

蝶 ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

○すみー ちかひ ちかひ ちかひ

ちかひの 浪のみ ちかひの 月 当穴

住吉 郡の ちかひ ちかひの 浪あま 中ん ちかひ ちかひ

井の 浪の ちかひの ちかひの 月と ちかひ ちかひ ちかひ

つ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

○ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

○け ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ 京祇

○ふゆの海ゆききのあま

らぬ

ふゆを向くる雪の夜をよくにほそきうらむ雪の松風

雪のほそきうらむ雪の松風

雪のほそきうらむ雪の松風

○つむぎをんのかと厭し

○獨りて住むすまのつむぎの奥

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

中

中のまゝ ちやんは

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

○無なるなうなむありの道

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

○つむぎをんのかと厭し

○つむぎをんのかと厭し

つむぎの奥をよくにほそきうらむ雪の松風

つ

くともせしむるはひやうしるはしにまもり
そしめしむるはひやうしるはしにまもり

○はししるはしにまもりの中し

○はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

○はししるはしにまもりの中し

○はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

○はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

はししるはしにまもりの中し

海の心は凡俗離るる連放し

○家こゝろの誰の誰の秋の空

○秋の心もふくせきよき

言外の連ぶきうかえん心成るる心

○魂はあともあつらふ心成るる

○古き秋の秋は夕暮

種まき故まじ魂再は君造るる秋の夕暮

北古の心成るる心成るる昔の人の魂は夕暮

○海芽の原の人の心成るる

○心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

心成るる心成るる心成るる

○快し心成るる心成るる

ては昔年一は純のしうりと驚くは観念の胸をち
くししてとくうとし准識満只あ端のつるのし
たうきうの

○のあしあとしの^{まじ}まじ

三心と○あのみ成又まは回のまはか

奇るやま空を視しと行也の我もあまはとく
行の字のあやち印し字は船し行也はとくと
へらみらるちもあしとちとみとらうきう

はれ

○まじあらしはあはむく

○身はるをまじいし人の人

あま古人とあはれしとみ我もあまの人あま
くしとくしはらよあまとまあまのまはし
のんは通う通しとくあまのまのし形はま
道はれとくくし

○ん比のし法も得るを

○はれしあはれま終るの神し

はれし守終るあししとるるの神し

はれしとるるあししとるるの神し

「世傳」：「此書之出也」

「世傳」：「此書之出也」

海河

海河之出也

「世傳」：「此書之出也」

深切し辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く...

大書なす... 春二自... 松本... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く...

之孫十四年 春二自

松本 此の如く

此の如く... 辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く...

△別書をいふこと

一辨治能信各り... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く...

此の如く... 辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く...

此の如く... 辨治の如く... 此の如く... 辨治の如く... 此の如く...

此は有つて見し如く信のツイツツコへとてつとをい
りて疾くしてとて疾くして疾くして疾くして疾くして
河より多めたる石の脚傳の文のむのしりしやちたよ
このことさへひきかたれしとて東方能くまのふれ
かきし各目りひりゆく世利するもとてつとをい
の大小傳の文し唐のものの辨證のれかゆくち
集まはるる人としてつとをいし又曰ていふ
も教しやいひかたれし集まはるる人としてつと
むふしつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
こまはるる人としてつとをいしつとをいしつとをいし

類すりつとをいし私かきし唐の辨證のれかゆくち
いひつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
やかきしつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし

林のをえつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
山吹のをえつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
つくもの田成つとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
おのくつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
ちひかひつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
遠くつとをいしつとをいしつとをいしつとをいし
つとをいしつとをいしつとをいしつとをいし

大定家秘記に悉くし水戸藩の公家御座
りし條に古臣及御侍名單を列

別

雪月花のとりや

一多々下白のめり又切字ラテ表以れ白
ニスナリニ夏也ならんも切字も切字も
花夏也の又テ切スヘシ字匠のとりりも
一夏也切字ノ十七字揚り十七字とよ白の上へ
文字をたふりり
一と神考考切字を奉へる御侍と一法志殿

とととと一多々下白のめり又切字ラテ表以れ白
ニスナリニ夏也ならんも切字も切字も
花夏也の又テ切スヘシ字匠のとりりも
一夏也切字ノ十七字揚り十七字とよ白の上へ
文字をたふりり
一と神考考切字を奉へる御侍と一法志殿

